“清楚・上品”という「花ことば」をもらっているササユリ。最近はめっきり見かけることも少なくなった。いや激減していると表現する専門家もいる。環境分野の専門家、森林・里山の専門家、草花・園芸の専門家に加え、自称知識人や愛好家たちはこの花に対する思いも強く、その分懸念する声にも力が入るのかもしれない。ホタル同様かつては広く国民の暮らしに溶け込み、生活に潤いを与えてくれていた地球の仲間のひとつである。消えてゆくことへのさびしさを感じるのは専門家だけではない。

花を咲かせない限りなかなかその存在すら気づかれない反面、咲くと持ち帰り育てたい誘惑にかられる花なので、昔からついつい持ち帰りされてきた花かもしれない。

ササユリは種子を飛ばして繁殖する。種子から芽生えたササユリは、他の野草と異なり成長が非常にゆっくりで、花を咲かせるまで成長するには 6～7 年はかかる。その後、数年は居場所を定置するがその後は種子を飛ばして衰退していくらしい。その間、微妙な日当たりや温湿度を敏感に感じながら子孫を残していく。持ち帰って植えても翌年か 2 年は咲くが、その後は必ず枯れてしまうという習性をもつはかない花である。

里山の利用がなくなり、森が放置され暗くなってきたことが、ササユリの居場所をなくしまった。

今年は、『国際森林年』の年。森の力を見つめなおし、ササユリを復活させ、森の恵に感謝する年としたい。

（ひしのみ 122 号　写真と文広報部　菅田 忠志）